最低生計費試算調査の実施に関する報告

アジア経済論ゼミナール（4 年生 4 人、3 年生 8 人）では、2020 年度前期の活動として、茨城労連（茨城県労働組合総連合）が実施する最低生計費試算調査に協力した。静岡県立大学の中澤秀一准教授が本調査の監修としてかかわった。

最低生計費試算調査とは、生活実態調査（35 問の質問）と持ち物に関する調査（253 問の質問）を行い、生活に必要なものを一つひとつ丁寧に積み上げていく「マーケット・バスケット方式」によって、普通に暮らすために必要な費用を算出するものである。今回、分析の対象としたのは、若者（10 代～30 代まで）の単身者である。

ゼミ生は、①2020 年 2 月から 5 月にかけて、茨城労連が調査票を配布、回収後のデータの加工作業、②合意形成会議（最低生計費試算調査では、持ち物調査による保有率 70%以上の品目の選定が恣意的にならないように調査回答者の数名から 20 名程度が参加する、合意形成会議を設けている）へのオブザーバー参加、③持ち物調査によって明らかにした保有率 70%以上の品目の市場価格調査、④茨城県庁、茨城県政記者クラブでの記者会見（2020 年 7 月 29 日実施）の参加、にかかわった。

上記の活動期間中は、新型コロナウイルス感染症の影響下にあり、学生たちは様々な制約を受けた。ゼミ活動もオンラインで実施することになり、ゼミ生同士の議論や資料作成などはスムーズにいかないことも多かったようだが、その中でも互いに協力し合い、茨城県の最低賃金審議会で茨城県の最低賃金が検討される前に記者会見を実施することができた。ゼミ活動では、上記の活動以外にも、『最低賃金 1500 円がつくる仕事と暮らし』（後藤道夫・中澤秀一他、大月書店、2018 年）や、コロナ禍の労働者の実態を特集した『雑誌世界』の 6 月号を輪読し、現在の日本社会の労働状況について理解を深めた。

今回、後援会より学生たちが市場価格調査と記者会見に参加するための交通費をご支援いただきました。最低生計費試算調査の一連の活動にかかわることによって、学生たちは日本の最低賃金の問題を認識するともに、今後、生きていく日本の将来について、考えを深めることができたように思います。指導教員として、学生たちが本調査にかかわった意義は大きかったと感じております。2020 年度の後期も、前期で学んだことを生かして活動していく予定でおります。ご支援ありがとうございました。

（アジア経済論ゼミナール担当者：長田華子）

以下、代表学生 3 名の感想を掲載します。

人文社会科学部 3 年　野口峻太郎

はじめに、最低生計費試算調査という、私たち学生も含む、多くの人々にとってかかわりの深い活動に参加させていただいたことは、私にとってたいへん貴重な経験でした。

市場調査では、まずデータの加工を行い、その調査票を基に、市場調査を行いました。調

査は、実際に店舗を回って価格がどうなっているか見て、情報を集めました。調査で大変だったことは、同じ品目の価格の多さです。最低価格や最高価格は、あまり時間をかけずに見つけることができますが、標準価格は、その商品の最多価格で決めるため、カーテンなど、購入量や長さなどで価格の幅がいくらでも決まってしまうモノの標準価格を決定するのには苦労しました。また、スーツや、パソコンの調査では、店員に話しかけらましたが、実際に買うそぶりを見せ、何とか乗り切りました。ですが、この調査は、普段の消費者としての目線とはまた違った角度から商品を見ることになりましたから、いい経験になりました。

記者会見では、私は、ゼミを代表して出させていただきました。私は主に、最低賃金や「コロナ禍」を含む現代社会の問題点について、ゼミで調べ、議論して得た知識など、ゼミでの意見を反映させた内容を述べました。記者会見を受けるのは初めてのことで、慣れていませんでしたが、私たちのゼミ内での活動をこうして記者に伝えることができて、よかったと思います。その意見がどこまで反映されるかは分かりませんが、最低賃金の上昇に少しでも寄与できれば十分だと思います。ですが、「コロナ禍」という社会状況の下、私たちの調査の結果が、最低賃金審議会に反映され、最低賃金が上昇することを期待しています。そして、それによって、少しでも多くの労働者が豊かな暮らしができることを願います。

人文社会科学部 4 年　戸澤琴音

今回の調査に参加することで、最低賃金の低さや地方に住む若者が置かれている現状を再認識することができた。そして、それに関しての学生としての自分たちの希望や意見を外部に発信することの大切さも学んだ。茨城県の最低賃金が低いことは認識していたが、私は実家で暮らしているため、アルバイト先の時給が低くとも生活に困窮することはなかった。しかし、今回調査の対象とした一人暮らしの若者世帯の現状の分析を進めていく中で、茨城県の最低賃金の低さでは、生活することに精一杯で、趣味にお金を費やすなどの豊かな暮らしを送ることが難しいと知りショックを受けた。私は、調査に携わる以前は豊かな生活を送るには最低賃金が 1500 円、また月給が約 25 万円以上必要であることを知らなかった。就職活動を通して見てきた会社の初任給はどこも 20 万円前後であり、昇進昇格やボーナスなどを除けば、正社員であっても初めのうちは、満足な暮らしは送れないのである。私と同年代で、これから社会に出る学生も、この事実を知っている人は少ないと思う。私たちが学生の立場から調査をし、それに関して抱いた率直な感想を記者会見の場で伝えられてよかったと考えている。今回の記者会見の内容は、県内のメディアにも取り上げられた。メディアを通して、特に私たちと同じ世代である若者に、この事実を知ってもらい、少しでも興味を持ってもらう事によって、最低賃金引き上げの第一歩になればよいと感じている。この調査などで学んだ事を、社会に出てからも忘れずに生活を送りたいと思う。

人文社会科学部 4 年　中橋彩乃

今まで、バイトの求人などで最低賃金ギリギリのお給料が提示されていることに何の違

和感も覚えませんでした。しかし、今回の調査によってこのお給料で暮らしている人がいること、多くの時間働いたとしても「ふつうの暮らし」を送ることが難しい人がいることに気づきました。またこれは、他人の問題ではなく自分自身の問題であるということにも気づきました。この調査を行うことによって、学生の私たちは既に社会に働きに出ている先輩達の経験を目の当たりにし、社会にでる準備がひとつ出来ました。

価格市場調査では、一人では出来ない作業のため、コロナの影響で打ち合わせなどがオンラインでしか出来ず、苦労した面もありましたが、10 人全員が自分の役割に責任を持って行い、無事に終了させることが出来て良かったです。

また記者会見原稿に参加するということは、全ての人が出来るわけではない貴重な経験であったと思います。沢山の記者の前で自分たちが学んで来たことや、思い正確に伝えることがこんなにも難しいだなんて知りませんでした。沢山の人のサポートを受けながら、なんとか成功できてよかったです。

今回の調査で、普通の学部生では体験できないことをさせていただき、とてもよい経験となりました。これから、この経験をどう生かしていくか考えていきたいです。

写真①市場調査

市場調査②

市場調査③

記者会見①

記者会見②